

令和3年度山梨県南都留地域教育フォーラム提案書

社会福祉法人真正会 幼保連携型認定こども園開地保育園

園長 亀澤 正隆

『22世紀を生きる子どもたちを、今どう育てるか』

～未来を担う子どもたちに必要な「力」を育むための実践・挑戦～

保育と教育 <連携のはじまり>

- アメリカ・デューク大学 経済学者 キャシー・デビットソン

「2011年度にアメリカの小学校に入学した子どもの65%は、
大学卒業時に、今は存在していない職業に就くだろう。」

情報化・グローバル化・AIの飛躍的進化がもたらす、未来の生活の変化



予測困難な時代に合っても、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育みたい



未来を生きるために、今備えるべき「力」とは

アメリカの経済学者 キャシー・デビットソンは「2011年にアメリカの小学校に入学した児童の約65%は、今存在しない職業に就くだろう」との研究結果を発表しました。

これにより、AIの進化が人の仕事を奪うことの懸念や、今学んでいることが通用しなくなるあるいは必要なくなる懸念されるようになりました。

この時代の変革期に、私たちが未来に向けて今できることは何だろうか？ AIに取って代わられることのない、今備えるべき「力」とは？

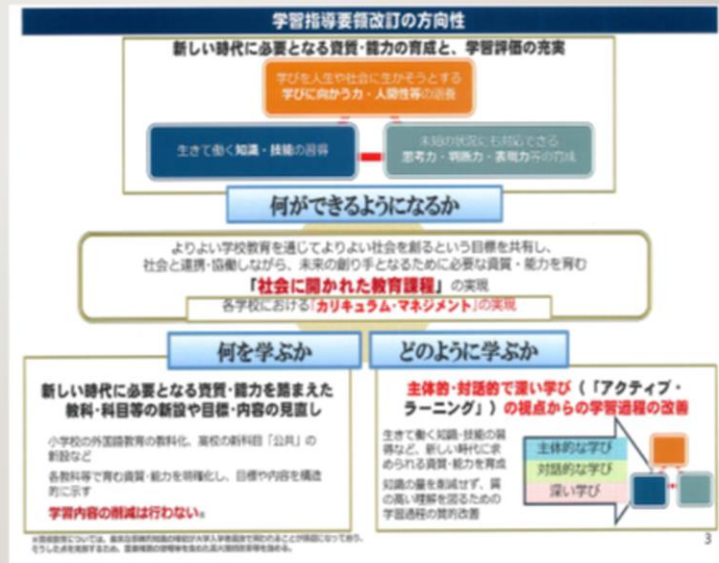
「子どもの育ち」について、「教育」という観点から新たな改革が始まりました。

学習指導要領改訂

- 昨今、**非認知能力**の重要性が明らかになってきた。



- 「**学び方**」の見直し・検討
(アクティブラーニング等)



まず、学習指導要領が見直されました。

ここで注目されたのが「生きる力」です。

- ① 学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性など」
- ② 実際の社会や生活で生きて働く「知識及び技能」
- ③ 未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力など」

として、「生きる力」を養う学び方が検討されました。

これに伴い、一足先に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「認定こども園教育・保育要領」が改訂されました。子どもたちの「学び」について、幼少期～高校までの学びが1本化された歴史的な改革でした。

これにより、幼児教育が小学校以降の教育の「準備」ではなく「土台」と位置付けられました。幼稚園・保育園・認定こども園は、教育の「土台」を担う立場となり、保育園としての在り方をもう1度見直さないとはいけません。

保育の変革

全体教育のベースを作る場所として、どのように子どもの「資質・能力」を育てていくのか、
いかに「遊びから学べるか」。



“子ども「と」楽しめる 子ども「を」楽しめる保育”
体験型・目的主導型保育 へ

こうして、「保育」というものの概念を考え直しました。
これまでの「保育」の価値と、未来に向けた新たな「保育」の在り方を模索しながら、たどり着いたのが「体験型・目的主導型の保育」です。


「体験型・目的主導型の保育」とは、子どもの思うままにただ自由に遊ばせておくのとは違います。子どもたちの遊びに答えが1つだと決めつけないこと、子どもたちの創造や発想を応援し、大切にして保育することです。

子どもたちは基本的に自分で遊びを選びます。自分で遊びを選べないときは、先生が与えられる選択肢から自分で決めます。この「選ぶ」とか「決める」には、たくさんの「考える」という要素が詰まっています。考えるためには「経験」が必要です。だから当園の保育には、いろいろな遊び方があり、その遊びの積み重ねが子どもたちの経験値になっていきます。これこそが「遊びが学び」だと思っています。

公式に当てはめて答えを導き出すのか、公式はわからないけれど、自分の知っている情報や技術などを駆使して答えを導き出すのか・・・といったことですが、知識量と柔軟性でいったら圧倒的に後者です。これからの時代に求められているのは、後者の方であると感じています。

これからの時代に求められる人材は「言われたことならできる、あるいはマニュアル通りに行動するよりも、新しい発想ができたり、理論的に思考できたりする力がある人」だと推測されます。そのために必要なのは「考えること」なのです。

【事例 ～「遊びが学び」の積み重ねが、どのように行事に生かされていくのか？～】



学びへの導入

「節分」から学ぶ

- 子どもたちが気になったこと
 - ・だれからのてがみ？
 - ・だれがくるの？
 - ・いつくるの？
 - “りっしゅん”って？
 - ・なにをしにくるの？

↓

子どもたち同士のディスカッション
が始まる

【ストーリー】

ある朝、保育園の壁に弓矢が刺さっていました。弓矢に気づいた子どもたちは、その弓矢についていた紙を開きます。その紙には<りっしゅんのぜんじつにいくぞ かくごしておけ>と書かれていました。すると子どもたちからは「“りっしゅん”ってなに？」「“ぜんじつ”ってなに？」「このてがみて、だれからきたの？」「だれがくるの？」「なにをしにくるの？」そんな会話が聞かれてきました。ここから、子どもたちのディスカッションが始まります。

【解説】「遊びが学び」へのしかけ

行事を知るだけでなく、行事からいかに学ぶかを考え、保育士たちが「しかけ」をしました。保育士が大切にしているのは子どもの興味を引き出すしかけ(きっかけづくり)です。このしかけの中には、子どもたちのディスカッションへのヒントや手掛かりが隠されています。これが子どもたち同士のディスカッションへの材料となり、その後の展開につながります。



「節分」から学ぶ

ディスカッションの結果…

「どうやらオニのしわざらしい…。オニはイワシと
柁で倒せるらしいよ！」

- 柁を探しに森のほいくえんに行こう！

・「柁は前に森のほいくえんに行ったときに
見たことあるよ！場所もわかる！」

・柁は全部取ってしまうと来年生えなくなってしまう。新芽は取っちゃダメだよ！」

遊びが学びの積み重ね

【ストーリー】

ディスカッションの結果から「どうやらオニのしわざらしい…。」ということがわかり、オニを追い払うための話し合いが始まります。子どもたちからは、「家でお父さんやお母さんにきいてくる！」「インターネットで調べよう！」「絵本か紙芝居で読んだことあったよ！」など様々な意見が出ました。

その後、節分を描いた紙芝居から「イワシのにおいと柁があればオニは倒せる」ということがわかりました。ある男の子の「柁って、たしか前に森のほいくえんに行ったときに見たことがあるよ！場所もわかるよ！」という話から、子どもたちは背負子をしょって森のほいくえんに探しに行くことにしました。男の子の案内の通り、そこには柁がありました。見つけた柁を取って帰ろうとしたとき、ある子から「全部取ってしまうと来年生えなくなっちゃうよ。新芽はとっちゃダメだよ！」という発言が聞かれ、脇から出ている枝を取ることにしました。

※森のほいくえん：南都留森林組合様に整備を行っていただいた当園の裏山のこと。子どもたちが週1～2回遊びに行くこの森を「森のほいくえん」と呼んでいます。

【解説】 結果よりもそこまでのプロセスを大事にする。

柁を取る時に、新芽に注目する子どもはなかなかいないと思います。大人ですら知り得ないことかもしれません。子どもたちは毎週、宝の山ふれあいの里に行って園外活動を行っています。そこで“ばんちょ”こと、学芸員の佐藤さんから、遊びを通して森との関わり方を学んでいます。まさに、その学びが発揮された場面でした。

ここで注目したいことは「遊びが学びの積み重ね」だということです。子どもたちがわからないことに会った時、大人がすぐに答えを教えることは簡単です。しかし、それでは「考える」という手段が飛ばされてしまいます。答えを知ることだけが大切なのではなく、「考える」ことを大切にしています。これが「結果よりプロセスを大事にする」保育につながっています。



「節分」から学ぶ

「イワシを焼くから火起こしをしよう！
小さいおともだちもいるからあぶないよ
ね。じゃあ、近づかないように準備し
よう！」

遊びが学びの積み重ね
＜リスク管理＞

【ストーリー】

節分の朝です。イワシを焼く準備を始めました。園庭では小さなおともだちも遊んでいます。それを見た子どもたちは「小さいおともだちもいるからあぶないよね。じゃあ、近づかないように準備しよう！」と園庭にあった柵を使い、作業場所を囲いはじめました。

【解説】 成功も失敗も子どもにとっては経験値。ただし、失敗を失敗のまま終わらせない。

宝の山ふれあいの里では、火起こしの仕方、のこぎり・なた・斧などの使い方も学んでいます。火起こしをするにあたり、火の扱いについても学んでいるため、この際のリスク管理も習得しています。

宝の山での火起こし体験は、指導されたとおりに火をつけて火を起こせばよいものではありません。もちろん事前に火の起こし方についての説明はされますが、いざ体験になると、大人たちは手出し口出しはしません。子どもたちが自分たちで試行錯誤を重ねながら、それぞれのやり方で火起こしをします。子どもたちが自分の力で火起こしをするのには時間がかかります。半日かかってやっと火がつくこともあります。1日かけても思うように火が起こせないこともあります。でもそれでいいと思っています。そんな時、必ず一人ひとりと振り返りをします。「どうしてつかないんだろうね？」「どうしてこうなっちゃったんだろうね？」子どもたちからは「こうだからかなあ？」「これがないからだと思う。」など様々な考えが聞かれます。見守っている大人たちが、気づきを与えたり、アドバイスを加えることもあります。そして次なる挑戦への準備をします。こうして再度挑戦してみる→できた！の積み重ねが、1つ1つ経験になっており、うまくいかない経験も、失敗して振り返り、試した分だけ「知恵」となり、また内容によっては「リスク管理」という言葉に形を変えて、また彼らの経験値となっているのです。

このリスク管理の1つとして、危険な場所に小さなおともだちが近づけない工夫をしていたわけです。子どもたちの声から始まった火起こしですが、子どもの「やりたい！ やってみたい！」という

思いだけではなく、安全にできる能力が身についているか、また実施できる環境か等をきちんと判断してから了承するという流れはきちんと確認しなければいけません。それは大人側の「リスク管理」です。子どもたちの考えやアイデアを活かすということは、それを安全に叶えてあげられるだけの保育士の能力・スキルも必要となってきます。保育士たちもいつも真剣に学んでいます！



「節分」から学ぶ

「ぼくは薪を切るよ！ぼくは焚火台を準備するよ！ぼくは火をつける係がいい！」



- ・道具を使う技術・ルール
- ・安全管理
- ・必要なものの準備・片付け
- ・役割分担の確認

遊びが学びの積み重ね
＜本物を知る＞

【ストーリー】

安全を確保した子どもたちは、各々に自分たちで役割を決め、仕事を始めます。

「ぼくは薪を切るよ！ぼくは焚火台を準備する！ぼくは火をつける係がいい！」など、自分のやりたいこと、得意なことを活かしながら、活動が進んでいきます。火がついて次の作業に移る時は「ぼくがこの火を見ているから大丈夫だよ！」と声掛けができ、ここでもきちんとリスク管理が果たされています。

【解説】 自分の役割・大人の役割

この場面では当園の大切にしている姿が見られました。

1つ目は、「“節分にやってくるオニを追い払う”という目的は一緒でも、それぞれがそれぞれの役割を持って行動している」ということです。

自分のやりたいことや得意なことを発信し、お友達同士も納得しあい行動します。任された子どもは責任と自信を持って活動します。時にはできないこともあります。それは「ここができないから手伝って！」と自ら伝えられることで、周りが助けてくれます。ここで大切なことは、大人が先回りしないことです。火起こし体験の時と同じですが、大人は子どもよりも知識や経験が豊富であるがゆえに、つい失敗をさせない声掛けや手助けをしがちです。でも、それでは子どもはその方法しか知ることができなくなります。もしわからなかったりできなかったりしたときには、自分の口から「わからない、あるいはできないから手伝ってほしい。」と素直に伝えることができる方がよっぽどいい学びであり、社会に出てからも必要なスキルです。

2つ目は「本物に触れているからできる行動」です。焚火台やのこぎりなどは危険と隣合わせですが、使い方をきちんと学習すれば年長児もきちんと使いこなすことができます。年長児からの想像できない声掛けや段取りの良さは、日頃から本物に触れ、技術やルールなど学んできたからこそできる行動だと感じます。



「節分」から学ぶ

・「イワシを買ってもらおう！何個必要？**数えて、給食の先生にお願い**しに行こう！」

・新しいことを「知る」「学ぶ」意欲はこういところから生まれています。
(お手紙を読みたい！書きたい！数えるためには数を知らないといけないな！etc…)

・自分たちだけではできない部分は、人をお願いできるようにしています。

遊びが学びの積み重ね
＜学びのきっかけ＞

【ストーリー】

イワシを焼く役割の子たちは、前日「イワシを買ってもらおう！」という話し合いをしていました。イワシをつければそこからはオニは入ってこないと知った子どもたち。オニが入ってきそうなどころには全部イワシをつけなくちゃ！ということで「イワシ何匹必要か数えてこよう！数えたら給食の先生にお願いしに行こう！」という話の展開になります。

【解説】「教科」を学ぶきっかけ

日常の経験やお友達からの発信などをきっかけに、自分たちで創造して作り上げたいときには、いつも必要な物は自分たちで考えて相談しています。

新型コロナウイルス感染症が発生する以前は、自分たちでやりたいことをするための話し合いをし、やりたいこと・必要なものを園長に伝え、お金の相談をして、OKが出たらバスの運転手さんをお願いしスーパーなどに買い物に連れて行ってもらっていましたが、今年度は感染予防の観点から、給食の先生にイワシの購入をお願いすることになりました。しかし、これも子どもにとっては良い学びの場でした。「自分たちができないことや難しいことは誰かにお願いする」ということです。

また、今回はイワシの数を数える、給食の先生にお願いするお手紙を書くなど、「教科」に触れる経験も出てきました。イワシの数を数えるためには「数を数えること」が必要です。給食の先生にお手紙を書くためには「字を書くこと」が必要です。この「これをしたいから、これができるようになりたい」といったことが意欲となって、新しい「学び」を取り入れています。



「節分」から学ぶ

- ・「オニは扉から入ってくるから、全部の扉に柵とイワシを飾ろう！」
- ・「いろは（向かいに立つデイサービス）にも飾ってあげたほうがいいね！」



- ・他者への思いやり
- ・伝統の理解と継承

遊びが学びの積み重ね
 <生活と保育のつながり>

【ストーリー】

イワシを焼き終わった子どもたちは、柵の先にイワシの頭を付け、園内中の扉に麻ひもで飾りつけました。未満児の部屋の前にも飾っていると、真剣な表情で飾っている年長児を見ている小さなおともだちの姿も見られました。

飾りつけは保育園にとどまらず「いろは（向かいに立つデイサービス）にも飾ってあげようよ！おばあちゃんたちがオニに襲われたら困るよね！」「お世話になっているお寺にも飾ろう！」とやさしい声があがり、それぞれの場所に飾りに出かけました。

【解説】文化・伝統の継承

子どもたちは、小さなおともだちやデイサービスのおじいちゃん・おばあちゃんたち、お寺など他者への思いやりを持って行動していました。

これは、小さい頃からの積み重ねの賜物だと思います。

ご家庭や保育園、地域の方々など、関わる人たちに大切にされてきた経験、保育活動を通して「自分を認められる」「相手を認められる」こと、これらが彼らの自己肯定感を育み、また相手に対する優しさも育てているように思います。

また、「節分」という伝統文化を、聞いて教えられるのではなく、自分たち自身で調べて行事を作りあげることで、伝統文化の理解が深まったように感じます。この経験が伝統の継承となり、また、その姿を見ていた小さなおともだちは、「かっこいいな。大きくなったらあぁなりたい！」というあこがれを抱き、それが保育園の行事の継承となっていきます。年長児の姿はいつも小さなおともだちのあこがれとなり、保育園の文化を作ってくれます。

開地保育園の保育

➤ 学びに向かう力、人間性の涵養

➤ 生きて働く知識・技能の習得

➤ 思考力、判断力、表現力の育成

【新学習指導要領】につながる保育

- 結果ではなくプロセスを大事にする
- 自由保育をしているからこそできる、カリキュラムマネジメントを意識した保育を
- 大切なことは自分たちで考え、実践してみることから得る「気づき」であり、正解を出すことではない
- 目の前で展開される活動に、必ずしも正解は1つではないという柔軟性を大人が持つことが子どもたちの自信となる

「主体性」を応援することで、子どもたちの経験の幅を広げる

「遊びが学び」の積み重ねが“未来を生きる力”になる

子どもたちの発想や物を見る視点は本当におもしろい！大人が考え付かないようなことをさらりと言ったりやってみたり。私たちは、そんな子どもたちの「おもしろい！」「不思議！」「知りたい！」という好奇心にはじめから答えを与えるのではなく、その過程を大切にしながら保育を行っています。

大切なことは自分たちで考え、実践してみることから得る「気づき」であり、正解を出すことではないと思っています。そして、これが次なる好奇心につながっています。このプロセスが子どもたちの「主体性」の育ちにつながっているのだと考えています。

大人が、目の前で展開される活動に必ずしも正解は1つではないという柔軟性を持つことが、子どもたちの自信となり、意欲となり、主体的な学びを広げてあげられるのだと思います。自分たちで話し合いもしたり、1日の終わりには、その日にあった出来事についてのふりかえりをしたりもしています。それら1つ1つが繋がって保育が積みあがっていきます。

これからの子どもの育ちのために、今考えたいこと

学ぶ機会を社会と共有すること

- 主体性・多様性の保育を実現するためには、保育士の持つ知識だけでは限界がある
→ 地域の専門家・プロと連携する
- 本物を知ること、よりリアルを経験することができる
- 保育士の負担も減る



地域連携を図ることで、保育・教育の限界を作らない = ポジティブな連携

これからの子どもの育ちのために必要な「主体性・多様性」の保育を実現するためには、今の保育では限界があります。マンパワーの問題はもちろんのこと、子どもの多岐にわたる興味に保育士が持つ知識だけで安全に取り組むことが難しいという課題に直面するからです。

当園では、地域の専門家(大学教授・学芸員・森林組合・大工・木材製材所など)と連携することで、この課題を解決するとともに、専門的な知識とよりリアルな経験をすることができることで、子どもたちの関心を深めています。

子どもたちのやりたい！を実現するためとはいえ、保育士がそれを一手に担うのは不可能です。しかし、このように地域との連携を図ることで、本来であればできなかったことができるようになるのです。連携を図ることは、決して相手にお任せすることではありません。保育士は保育士としての専門性を活かして、きちんと目的や意図、子どもたちの声を、関わってくださる地域の方々にお伝えし、確認して、目的を共有しておくことが大前提で成立します。

私たちの住む地域には、子ども心を持って一緒に楽しんでくれ、そして協力してくださる大人がたくさんいます。いろいろなスキルや考えを持った方がいるし、何かやろうと言ったときに賛同してくれる方たちがいる。なにより、子どもを一人の人として尊重してくれています。大人が限界を決めないことこそが“ポジティブな連携”であり、これからの「子どもの育ち」に必要不可欠なことだと感じています。